
集合写真

出口 常葉

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

集合写真

【Nコード】

N4756C

【作者名】

出口 常葉

【あらすじ】

夏のある日、僕は腐れ縁の萩田から少年野球チームを作ろうと持ちかけられる。いろいろと不安もあり、決めかねる主人公の背中を押したのは、元マネージャーである奥さんの言葉だった。

小学校の入学式も無事に終え、息子は小学一年生になった。ついこの間、生まれたばかりだと思っていたのに、時が経つのは早いものだとつくづく感じる。

休日のある日、新たに増えた息子の写真を収める傍ら、古いアルバムを見返していると、懐かしい一冊を見つけた。

その真ん中辺りのページに貼り付けられた一枚の写真は、僕にとって、いやここに写っている全員にとつて忘れられない一枚だ。それは当時、野球部で撮った集合写真。公式大会初勝利の記念に撮った一枚だった。

野球を離れて、十年以上経つけれど、この写真を見ると胸が熱くなってくる。もう一度野球をやりたい、野球と関わりたい、とずっと思っていたのは嘘じゃない。けど、今更何ができるだろう。サラリーマンとしての日々も忙しく、そんな余裕は見当たらない、そう思っていた。

突き抜ける青空と、きらきらした日差しが眩しい夏の日のことだった。

「子供たちのさ、野球チームを作りたいと思うんだ」

相談がある、といって荻田がわざわざ休みの日にうちに来て、いきなりこういったのだ。ソファで向かい合って座る僕達の間、一瞬沈黙が訪れた。シャワシャワとやかましく鳴いている蝉の音が、しばしリビングを占拠した。

「へ？」

僕は麦茶の入ったグラスを片手に、ひとまず怪訝な顔をして見せた。

荻田と僕は、高校時代からの腐れ縁で、共に野球部に所属していた。ポジションはお互い外野で、打力もどっこい。打撃センスとい

うものに不自由していた僕達は、常に八番の座を争うライバルだった。二人で仲良くベンチを暖めていた時期も当然あった。

そんな二人が、しかも野球を離れて十年以上経っているというのに野球チームの監督とコーチをする。

なんて無謀なアイデアだろう。

「公式戦で、ろくすつば結果も残してこなかった僕達がかい？」

「それは確かにその通りだけどな」

そう言いながら、荻田は一枚の写真を取り出して見せた。

「これ、覚えてるか？」

それは、この間見たばかりの集合写真だった。

「懐かしいな」

「三年生が抜けてさ、俺達の世代は不作だなんていわれて」

「そうそう、あの時のキャプテンが怒ったんだよ」

今でもそのときの事は忘れられない。いつもは温厚な笑顔の下に秘められていた彼の熱い血の滾りを、肌で感じさせられた僕達は、ある種の感動を覚えた記憶がある。

「必死に練習したもんな。先輩達を見返すためだけに」

人間は何が原動力になるか分からない。そのときの僕達は、先輩や周囲の低い評価に対する反発心が、日々の練習への原動力だったことは間違いない。ついでにそれを後押ししていたのは、腸の煮えくり返ったキャプテンの怒りだった。

そのおかげだろうか、僕達はわが母校の野球部史上類を見ない、結束した集団となった。そしてそれに呼応するように少しずつだったけど、チームの力もついてきた。

練習試合でも、たまにだが勝てるようになり、負けても次につながる負け方が出来るようになった。

相変わらず、八番ライトを争っていた僕達だが、その分、外野の守備に関しては、チームの一、二を争うほどになっていた。残念ながら、打力のほうは相変わらずさっぱりで、これに関しては三年間経ってもあまり変わらなかった。

「それで、夏の地区予選が始まったんだよ」

荻田はまるで昨日のことでも思い出すかのように、すらすらと話し続ける。もちろん僕だってそれは同じで、まるで昨日のことのように鮮明に記憶に焼き付いている。その第一試合、激戦の末僕達は劇的な勝利をおさめた。

そのときに、部員全員を集めて、監督が撮ってくれたのがこの写真だ。

その後、先輩達が詫びを入れにきたのが不味かった。それで僕達の胸のエンジンはあっさりと火を落としてしまったのだ。あの時、先輩達が軽い気持ちで「まぐれだろ」と言ってくれていれば、僕達は甲子園に出られたかもしれない。と、今でも本気で思っている。

結局、僕達は次の試合で負けて、あっさりと夏は終わった。けど、この一勝は今でも僕達にとってかけがえのない宝物だ。

「あら、二人して何のお話？」

そう言いながらリビングに入ってきたのは、僕の家内だ。

「やあ、マネージャー。何時見ても綺麗だね」

荻田の言葉に、まんざらでも無さそうな顔を浮かべる家内。

僕の家内は、野球部のマネージャーだった。ありがちなところでは、キャプテンと付き合いものなのだろうけど、あのときのキャプテンはそれどころじゃなかった。何をおいても野球一筋。そして、当然のようにそれに引きずられた僕達もマネージャーに目を向けている暇などなかった。というよりも、与えてもらえなかった。

たまたま進学先で再会して、交際の結婚だのはその後の話だ。まあ、アイドルだったわけだから、結婚すると決まったときには、当時野球部にいたみんなから手荒い祝福も頂いたけど。とにかくあの頃は、野球に必死で、野球が楽しかった。本当にその点で僕達は純粹だったと思う。

「いや、荻田のやつが少年野球のチームを作りたいって言うからさ」「この写真で説得していたところだよ」

そう言って荻田が家内に見せたのは、件の集合写真だ。もちろん彼女も写っている。

「あら、懐かしい」

そういいながら、僕の隣に腰掛けて、写真を手に取る家内。

「で、もう一度野球に触れてみたいと思わないか、という話だ」

荻田の言葉に、心が揺れるのが分かった。だけど僕は未だ悩んでいた。上手く教えられる自信も無かったし、仕事で休日出勤もある。おいそれと引き受けて、責任の取れない事態になることは嫌だった。「うーん、でもなあ」

自分でも歯がゆくなるほどに、はつきりとした言葉が出てこない。

「お前だって、覚えているはずだぞ、あのときのしんどかったけど楽しかった事を。みんなで一丸となって、成し得なかった事を成し遂げた達成感を。野球が本当に好きだった自分を」

ソファから立ち上がり、声高に演説する荻田。家内も僕の隣でうんうんと頷いている。荻田の言うことは間違いない。野球は今でも好きだ。だけど……。

「おやりなさいな」

迷う僕の背中を押したのは家内だ。

「野球が好きなら大丈夫よ。私も協力するわよ」

「お、マネージャーの力を借りれるのか、こいつはますますありがたい話だ」

ニコニコと笑いながら話を進めていく二人に対して、僕は悩んだままに結局、明確な答えは出せなかった。

「考えておいてくれよ。いい返事を待ってる」

そう言って、荻田はひとまず帰っていった。

その夜、リビングのソファに体を預け、僕は缶ビールを飲みながら、もう一度あの夏を思い返していた。キャプテンが抛った球数は、実に一四三球。圧巻の完投劇を締めくくる外野フライは、確か荻田が取ったのだった。その瞬間、ベンチも、それから僕達も弾けたよ

うに跳ね上がって叫んだ。それはもう、甲子園で勝ったかのような喜びようで、みんな笑顔で、掴み取った勝利を純粹に喜んでいた。あんな澆刺とした時代が自分にあっただなんて、僕が一番信じられない。

「あなた」

息子を寝かしつけた家内がリビングに戻ってきた。

「まだ、迷っているの？」

「・・・まあね」

僕の返事に軽いため息をつき、それから僕の隣に彼女は腰掛けた。

「野球、好きなくせに」

「そりゃね。でも、人を教えるとなれば話は違うさ。僕達がもう一度おっさんチームを作るって言うなら、飛びつきたいけどね」

「そうね」

彼女はそう言って、ちよつと困ったような笑顔を浮かべた。

「正直なところ、ちよつと怖いんだ。失敗して、野球が嫌いになったらどうしよう、とかね」

彼女は僕の言葉を聞いて、それから考え込むような表情のまま少し黙り込んだ。僕がビールを二口ほど飲んだところで、再び彼女は口を開いた。

「私ね、あなた達がチームを作ったら、あの子を入れようと思っているの。ゆくゆくは、エースで四番になるかもしれない」

「どうかなあ、僕の息子だけ。八番ライトがいいところじゃないか？」

「それでも良いわよ。ただ、あの子にも野球の楽しさを感じて欲しいの」

そういいながら、彼女はそつと僕の肩に頭を預けてきた。

「それでね、いつか二人であの子の応援に行くの。きっと凄く楽しいと思わない？」

「いいね、悪くない」

「だから、あの子が野球を楽しむきっかけを、あなたが作って欲しい」

いのよ」

そんなことを考えていたのか。僕はちっとも気付かなかった。

「どうりで、萩田の味方をしたわけだ」

「それにね」

彼女は僕を見上げるようにして話を続けた。

「あなたには、ユニフォームが一番似合うと思うの」

抜群の殺し文句だ。さすがはマネージャー。選手のやる気を出させるテクニクは一流だ。

僕は両手を上げ、降参を示して見せた。彼女は飛び切りの笑顔で僕に抱きついてきた。

青空の下、広がるグラウンドに金属音がこだまする。転々と外野を転がる白球。未来の大打者達が、ダイヤモンドを走り抜ける。

外野からの返球がキャッチャーミットに収まる頃には、ランナーは悠々と生還していた。

スコアボードの相手の欄に、点数が書き加えられ、目の前で萩田が肩を落とした。

チームを作って一年。すっかり監督が板についてきた萩田だが、チームの成績そのものは華々しいものではなかった。むしろ、負け試合のほうが多いかもしれない。

それでも、「楽しむ」をモットーに掲げていただけの事はある、笑顔だけは絶えない良いチームになったと思う。

息子もすっかりユニフォーム姿が馴染み、威勢の良い掛け声を上げている。打撃センスは僕なんかよりもずっと良い。このまま頑張れば、良い選手になってくれるだろう。鳶が鷹を生むという奴だろうか。

「親バカだな」

といていた萩田だが、その実力は認めてくれているらしく、今のところうちの息子はスタメンに入れて貰っている。

「はい、麦茶」

「ああ、こりゃどつも」

肩を落とす荻田に、紙コップに入った麦茶を手渡す家内の姿。僕の手元にもさつき届いた。

家内もマネージャー時代を思い出してか、せつせとチームの面倒を見てくれている。お蔭様で、試合のある日はいつも家族が揃っていられるのも嬉しいことだった。アルバムには、随分と息子の勇姿が増えてきた。それとは別に、チームが勝つたびに集合写真を撮っているのだけど、こっちはなかなか増えそうにない。アルバムが一冊出来るのはいつのことやら・・・だ。

それでも、僕はやっぱり野球が好きなることを再確認できた。この先、何年こうしてられるかは分からない。だけど今、こうして子供達のコーチとしてベンチに座っているのが楽しくて仕様が無い。

(後書き)

高校野球開幕ということで、野球を絡めて書いてみました。とてもまったりとした短編にしあがってしまいました。いつものことですが。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4756c/>

集合写真

2009年3月24日10時30分発行